

大決壊！
茶色い失敗



小日向杏奈1 ～公園でのマラソン中に～

P 3



小日向杏奈2 ～海で泳いでるときに～

P 32



牛久紬1 ～授業中、我慢できなくて～

P 53



牛久紬2 ～朝。満員電車でお腹を壊してしまい～

P 75



桃瀬比奈1 ～エレベーターが急停止！～

P 94



桃瀬比奈2 ～ブルマを穿いたままなのに～

P 123



むふふ(既刊紹介)

小日向杏奈1

～公園でのマラソン中に～

爽やかな初夏の風が通り過ぎるころ。

広々とした公園を、一人の少女が颯爽と走っていた。

やや青みかかった黒髪をショートカットに切り揃え、数歩先を見据えるかのような瞳はやや吊り目。

シンプルなシャツと、三分丈のスパッツに包んだ身体はスレンダーで、ほっそりと痩せている。

それでも少女としての膨らみはしっかりとTシャツを押し上げ、そしてスパッツに包まれているお尻は引き締まっていながらもむっちりとしていた。

(やはりこの季節の風は気持ちいいな。初夏は大好きだ)

少女の名前を、

小日向杏奈 (こひなた あんな)

という。

部活動では陸上部のスプリンターとして全国大会にも出場し、日々の練習に打ち込んでいる。

今日も学校は休みだけど、近所の公園にジョギングにきたというわけだ。

「はぁ……、はぁ……、はぁ……」

杏奈は規則正しい呼吸を心がけながらも公園を駆け抜けていく。

この公園は、杏奈のお気に入りだった。

大きな池を囲うようにして道が整備されていて、街路樹や芝生もしっかりと手入れが行き届いている。

お年寄りが散歩するにはもちろんのこと、杏奈のようにジョギングに来ている人もたくさんいる。

杏奈も、そのうちの一人だった。

(子供たちも遊んでて、いい天気だ)

子供が遊ぶための遊具も整備されていて、休日の今日はたくさんの子供たちが遊んでいる。

その様子を視界の端で捉えながら、杏奈は軽快にペースを刻んでいった。

ときは、よく晴れた日の昼下がりに。

空は抜けるような青空。

ジョギングをするには絶好の日和といえる。

――だが。

ゴロゴロゴロッ！

それはまさに青天の霹靂だった。

杏奈のお腹から、まるで雷鳴のような音が鳴り響いたのだ。
直後には、腸が捻れるかのような痛みに襲われている。

「はぁう!？」

あまりの腹痛に、杏奈は立ち止まってお腹を押さえてしまう。
桃色に上気していた頬は、一瞬にして蒼白へと転じていた。
額には脂汗が浮かんできている。

(ううっ、なにが原因？ 昼に食べた、ヨーグルト、か？)

思い返してみれば、昼ご飯に食べたヨーグルトは少し酸っぱかったような気がする。

それでも身体にいいからと、1カップを食べてしまったのだった。

恐らく、そのヨーグルトがお腹で悪さをしているのだろう。

(トイレ、行っとくか)

ぎゅるるっ。ごぼっ！

腸が蠢動し、軋むような音を立てる。

けどどなにも焦ることはない。

この公園には三つもトイレが設置されているのだ。

その一つは、もうすでに見えるところ……行く先のジョギングコ

ースの脇にある。

だから、なにも焦ることはない。

ゴロゴロゴロ……。

杏奈は急に痛くなってきたお腹を押さえながらも、再び走り始める。

ゆっくりと、だが確実に。

こうしてやってきた公衆トイレ。

……だが。

「うそ。満員だなんて」

ついていないことに、女子トイレは満員のようだった。

トイレの個室へと続くドアは、すべて閉ざされている。

ちなみに男子トイレはガラガラだ。

こういうときはいつも恨めしく思えてくる。

(どうする？ 待つか？)

逡巡。

だけど、トイレはいつ開くかわからない。

もしかしたらみんなお腹を壊していて、時間がかかるかもしれないし。

それに、ただでさえ女子のトイレは時間がかかる。

(まだ、我慢できそうだよな……うん)

待っている時間と、走って次のトイレまで我慢する時間を天秤にかける。それに、お腹の具合も。

そのすべてを天秤にかけた結果、

「よし、走って次のトイレに行くか！」

杏奈は、次のトイレまで我慢することにした。

気がつけば、ちょうど腹痛もおさまっている。

これくらいのお腹の具合なら、次のトイレまで我慢することは容易だろう。

この公園には、あと二つも公衆トイレが設置されているのだ。

それもだいたい 500 メートルおきに。

だから焦ることはなにもない。

500 メートルなど、走っていればあっという間の距離だ。

(次のトイレをゴールにするか！)

杏奈は切り替えると、次のトイレを目指して走ることにする。

ちょうど腹痛の波もなくなっているから、走ればあっという間だ。

……そう思っていたのに。

ぎゅるるるるるるる！

「うっ！」

お腹から鳴り響くのは、まさに雷鳴。

初夏の空は晴れ渡っているというのに、杏奈のお腹では雷鳴が轟いていた。

お腹に手をあてると、ゴロゴロと雷鳴が轟くたびに、腸の蠢動を感じ取れるようでもあった。

どうやら、残されている時間はあまりないようだ。

「大丈夫。500メートルくらいなんて、どうってことないっ」

ぎゅるぎゅるぎゅる！

杏奈はお腹に手をあてながらも走り始める。

しかしその足取りは、颯爽というにはあまりにもほど遠いものになっていた。

むりゅっ。

……もこり。

「ひっ、ひああ！」

直腸をくぐり抜けてきた、柔らかく熱い感触。

杏奈は引き攣ったソプラノボイスの悲鳴を漏らしていた。

ショーツのなかに熱いものが溢れ出してきて、スパッツに覆われているヒップラインが、もっこりと歪に膨らむ。

こうなってしまうと、もう、戻ることはできない。

(ま、まだ……漏らしてない……っ)

がに股になってしまいそうなところを堪える。

そんなところを誰かに見られるわけにはいかないし、それにこの気持ち悪い状況から逃れようとがに股になれば、肛門が開いて更に漏らしてしまうことになる。

(我慢……っ。まだ我慢しなければ……！)

杏奈は姿勢を正して、再び走り出すことにする。

それでもお尻に感じる不快感は消えてくれるわけではない。

しかしもう後戻りはできないのだ。

杏奈は、スパッツに包まれたモッコリと膨らんだお尻を晒しながら走ることになる。

それでもまだ大丈夫。

ふっくらと膨らんでいるヒップラインは、よほど凝視しなければ気づかれることはない……はずだ。

「次のトイレまで、あと、もう少し……！」

二つ目のトイレが、少しずつ近づいてくる。

しかし杏奈は早くも嫌な予感を察知していた。

なにしろ、公衆トイレの外にまで行列が伸びていたのだ。

それも、女子たちの。

(こ、これは……。もしかして、並んでる？)

嫌な予感を覚えつつも、杏奈はトイレを目指して走るより他ない。

こうして杏奈は腹痛を堪えながらも、なんとか二つ目のトイレへと辿り着く。

だけど嫌な予感というものは的中するものだ。

このトイレも三つすべての個室が満室で、あろうことか同じ年頃の女子たちが五人も並んでいたのだ。

これでは待っているあいだに漏らしてしまうに違いなかった。

それに、危機的なのは杏奈だけではないようだ。

「あっ、ああっ」

具合が悪そうにしていた活発そうな女の子が、突如おまたを前抑えをして呻き声を漏らす。

その数秒後――

じゅわわっ。

デニムのホットパンツに覆われている股間に暗い染みが浮き上がってくると、お尻のほうにまで広がっていく。

染み一つない真っ白な太ももを、黄金水が流れ落ちていく。

その様子を見ていた、後ろに並んでいる大人しそうな女子も耐えきれなくなったのか、その場にしゃがみこむと、

このような醜態を晒しても男子トイレに駆け込まないのは、思春期の女子としての羞恥心とプライドがあるからなのだろう。

(こんなのを見せられて、男子トイレに駆け込めない……！)

まさか、この光景を目の当たりにして、あとからやってきた杏奈が男子トイレに駆け込むわけにもいかない。

それにまだワンプ女子の大決壊は収まっていないようだ。

「あっ、ぐっっ」

おぼぼっ！

ビチビチビチビチビチ！

ワンプ女子は苦しげに呻くと、お尻から水っぽい爆音を炸裂させる。

ショーツから下痢が溢れ出しているのか、ワンプースはもう茶色くドロドロになっていた。

「い、イヤァ……」

最初におしっこを漏らしはじめた活発そうなホットパンツ女子も、ついには顔を真っ赤にさせてしゃがみこんでしまう。

ぷっしゃあああああああああああああ！

デニムの生地で覆われたおまたから、勢いよくおしっこが噴射される。

おしっこで靴を汚さないためには、しゃがみこむしかないのだ。だがしゃがみこめば膀胱が圧迫されておしっこが勢いよく噴射されてしまう。

女の子の尿道というのは、そういうふうに行っているのだから仕方がないことだった。

「わ、私ももう……ううっ」

「ボクも……うっ、うあああああ！」

並んでいる女の子達は、一人が漏らしはじめて我慢できなくなったのか、連鎖的にしゃがみこむとみんなおもらしをはじめてしまう。

なかには下痢を漏らしてしまい、ミニスカートから下痢が垂れてきている少女もいた。

(な、なんという悲劇……！)

その様子を遠目で見ていた杏奈のお腹の具合は、更に悪くなってきてしまう。

釣られるようにして、

にゅるるっ！

「おっ、おごっ!？」

もっこりとスパッツが盛り上がり、お尻が重たくなる。
もう、一刻の猶予も残されてはいなかった。
だがすぐ近くの男子トイレに駆け込むことは、女子としてのプライドが許してくれない。

「次の……三つ目のトイレなら空いてるはず……！」

もりもりっ！
もこっ！

呟いているあいだにも、肛門からは柔らかいものが溢れ出してきている。

いまにもへっぴり腰になりそうになるけど、なんとか堪えて走り始める。

一步でも前に進んでいるということは、それだけ着実にゴールに近づいているということだ。

小さな一步でも、いつかは必ずゴールすることができる。
だから杏奈は走ることが好きなのだ。

「あともう少し……っ。もう少し……！」

もこっ、もこりっ！
もすもすもす……っ！

杏奈は漏らしながら走ることになる。
お尻の割れ目が、茶色いものに満たされていく感触。

だけど足を止めるわけにはいかない。

次のトイレまで 500 メートルあった距離が、少しずつ、ゆっくりと縮んでいく。

あともう 100 メートル。

幸いなことに、並んでいる女子は一人もいない。

駆け込むなら今がチャンスだ。

だがトイレをロックオンして気が抜けてしまったとでもいうのだろうか？

もりもりもりっ！

ぷすっ、ぷすすっ。

直腸から大量のものが溢れ出してくると、スパッツの内側に柔らかいうんちが満たされる。

お尻がずっしりと鉛のように重たくなった。

だけど、ここで立ち止まるわけにはいかない。

「あともうちょっと……！ もうちょっとなんだ……！」

初夏の陽気に、醜悪な茶色い腐敗臭を漂わせながら、杏奈は走り続けることになった。

もう全身は脂汗と冷や汗でぐっしょりになっている。

ショーツもスパッツも、おまたやお尻、内股にじっとりとまとわりついてきていた。

それでも杏奈は三つ目のトイレを目指して走っていく。

ゴールまであと 80 メートル、50 メートル、20、10 ……。

額に脂汗を浮かべながらも、なんとかゴールを目指し――、そして。

「やっと……、できる！」

杏奈はついに三つ目のトイレへと辿り着く。

女子トイレに駆け込むと、そこはガランとした誰もいない空間。

「えっ？」

それなのに、杏奈は足を止めて愕然としてしまう。

なにしろ、トイレの個室へと続くドアはすべて締め切られていて、

『故障中』

と、あまりにも無慈悲な貼り紙が貼られていたのだ。

それも、五つある個室の、すべてのドアに。

「えっ、うそだ……っ」

あまりにも酷な光景。

現実を受け入れることができず、目眩を感じて失神してしまいそうになる。

肛門からも力が抜け、

にゅるるるるるるる！

愕然と立ち尽くしながらも、ショックのあまりに杏奈は失便していた。

このときになって、杏奈はここにくるまでの二つのトイレがなぜ混んでいたのかを理解した。

このトイレが壊れていたから、みんなギリギリの状態だということに並んで待っていたのだ。

「あ、うそ……。故障、してるだなんて……」

絶望感に肛門から力が抜けていく。

もりもりもりっ！

もこっ、もこもこもこっ！

直腸から溢れ出してくる、熱い感触。

お尻の割れ目が、熱い感触で満たされていく。

「ま、まだ……男子、トイレえ……っ」

もうなりふり構ってられなかった。

この年にもなって、うんちを漏らしていいはずがない。

杏奈には、男子トイレに駆け込むより他に道は残されてはいなかった。

決して越えてはならない見えない境界線。

そのラインを、杏奈はへっぴり腰になりながら越えて、男子トイレへと踏み込んでいった。

……だが。

『故障中』

男子トイレにも、三つある個室のすべてに、無慈悲な貼り紙が貼り出されていた。

プライドをかなぐり捨ててまで踏み込んだ男子トイレだということに。

その絶望感たるや、いままで杏奈が味わったことがないほどのものだった。

「そ、そんな……」

ぶりぶりぶりっ！

もりもりもりっ！

フッと肛門から力が抜け、大量の軟便を漏らしてしまう。

もりもりとスパッツが盛り上がっていく。

その膨らみはお尻の割れ目から溢れ出してきた、ふっくらとしたお尻を少しずつ大きく膨らませていった。

「あっ、終わった……」

女子トイレだけではなく、男子トイレまでもが故障中。
よりもよって、なんでこんな緊急事態に。

(いまから、二つ目のトイレまでUターンする?)

そんな考えが脳裏をよぎるけど、その力が残っていないのは杏奈が一番よく理解している。

それにもう、お尻は軟便によって大きく膨らんでいる。
うんちを漏らしていると、一目でバレてしまうことだろう。

「も、もう……むりい……っ」

杏奈に残された道。

それはもう一つしか残されていなかった。

それは……。

「せ、せめて……。人が、いないところで……っ」

杏奈はいまにも倒れそうな足取りでトイレをあとにする。

そして公衆トイレの建物の裏手にまでやってきた。

そこは陰になっていて、公園からは見えないようになっている。

——ここが、杏奈のゴールだった。

「うっ、うわあああああああああ！」

めりめりめりめりめりめりい！

悲痛な叫び声とともに、杏奈はついに決壊してしまう。

スパッツに覆われているプリッとした少女のヒップラインが、一瞬にして膨張していくと、

もわっ、もわわっ。

茶色く饅えた匂いが公衆トイレの裏側という、陰になった空間に蒸れ返っていく。

初夏の爽やかな空気が、杏奈の腐敗臭によって塗りつぶされていった。

「おっ、おご……っ」

ブリブリブリブリッ！

メリメリメリ！ にゅるる！

杏奈は苦痛のあまり、無意識のうちにへっぴり腰になっていた。

そこには颯爽とジョギングをしていた少女の面影はない。

肛門から溢れ出す苦痛に顔を歪め、額には脂汗を浮かべている。

思春期を迎えて女性的に膨らんだヒップラインは、もりもりと茶色く歪に、醜悪に膨張を続けていた。

「お尻、熱い、熱い、熱い……！」

むりゅむりゅむりゅむりゅ！

もりもりもりっ、もすっ、もりもりっ！

肛門から溢れ出す軟便は、マグマのように熱い。

ショーツのなかに溢れかえると、隙間なくお尻にまとわりつくようにして広がっていく。

スパッツが歪に膨張し、一回りも、二回りもヒップラインが大きくなっていった。

その様子は背徳的で、どこかセクシーに見えた。

「あっ、ぐうっ、い、いやああっ」

それでもショーツとスパッツを降ろさなかったのは、杏奈に少女としての最後のプライドが残されていたからだ。

女の子は、おしっこをするときでさえも、個室に鍵をかけて人知れずに尿意を放つ。

だからだった。

杏奈がショーツも、スパッツさえも降ろせなかったのは。

——だが、そのプライドがさらに杏奈を苦しめることになる。

「ま、前のほうまで……うっ、ううー！」

むりゅうううううううう！

みちみちみち！ ぶりっぶりぶりっ！

じゅもももももっ。
ぶりっぶりぶりぶりっ！

まさに、垂れ流し。
肛門から溢れ出してくる軟便は、さらに柔らかく、そして熱くなっていく。

大腸の奥のほうにあるうんちは、昼に食べたヨーグルトによってドロドロに溶かされているようだった。

「熱い、熱い、熱いよお……っ」

ビチビチビチ！
ズババッ！ ビチチチチ！

軟便は、いつのまにか下痢になっていた。
スパッツがうっすらと膨らんでいき、それでもスパッツに覆われているお尻からは下痢は溢れ出してきていない。

それは杏奈の恥辱を隠してくれているともいえるが……、杏奈は、自らの失敗のすべてをスパッツで受け止めなくてはならないということでもあった。

「ぱんっから……溢れ出してきて……うああっ！」

びちちちち！
ブリュリュ！ ブリュッ！

ショーツの足口から下痢が溢れ出してくる。
三分丈のスパッツに沿って、下痢が内股を侵食していく。
杏奈の内股は、自らの下痢に塗れていった。

「もういやぁ……。いやだよぉ……。っ」

ビチビチビチビチ！
ぢょわわっ、ぢょわわわわわわわわ！

滝のようなおしっこが内股を流れ落ちていく。
そのおしっこは、下痢の層に濾過されたことによって茶色く穢れていた。

「おまたに下痢が食い込んできてる……。ううっ」

ビチッ！ ブリリッ！
じゅもももももももももも……。

杏奈の内股は、茶色く濁ったおしっこによって汚辱されきっていた。
膝小僧も、ふくらはぎも。

脚を伝い落ちたおしっこは、杏奈の履いている運動靴に溜まり、
溢れ出してきている。

まるで杏奈だけが大雨のなかを歩いてきたかのようになっていた。

「はぁ……。っ、はぁ……。っ、はぁ……。っ」

杏奈は、全力疾走したあとよりも激しく肩を上下させている。
気がつけば……、便失禁はいつの間にか終わっていた。
だが、これはまだ終わりではない。

「ううっ、まだ……お腹、痛い……っ」

ぎゅるるるるるっ！

まだお腹にはドロドロに溶けた下痢が残っている。
最後まで出し切らなければ杏奈に安寧は訪れない。
ここで我慢すれば、またすぐにお腹が痛くなってくるに違いな
かった。

「どうしよう、どうしよう……っ」

それでも、杏奈にはショーツとスパッツを降ろす勇気が、どうし
ても湧いてこなかった。

それにもしもここでショーツを降ろせば、内股をさらに茶色く穢
してしまうことになる。

トイレが故障して、トイレットペーパーを使うことができないこ
の状況で、これ以上内股を汚すと取り返しがつかないことになって
しまう。

「うっ、うううっ！」



ぶりぶりぶりっ！
ビチビチビチィッ！

杏奈は再び爆音を轟かせ、下痢を漏らす。

スパッツに包まれたヒップラインがうっすらと盛り上がっていき、下痢がスパッツに沿って内股を這うように広がっていく。

だが、これはおもらしではなかった。

杏奈は、自らの意志によってお腹に力を入れたのだ。

「もう、こんなに漏らしちゃったんだから……ううっ、我慢しても……もう遅い……」

杏奈は諦めてしまったのだ。

これ以上下痢を我慢しても、苦しむ時間が長くなるだけ。

それならば、自らの意志で漏らしたほうが早く楽になれる……。

杏奈の沈んだ心は、茶色くて深い泥沼に沈んでいく。

「ふっ、ふうっ」

びちちちち！
にゅるるるる！ おぼぼっ！
おぼぼっ、！ ビチビチビチ……！

へっぴり腰になりながら、杏奈は自らの意志で失便を重ねていく。

ショーツのなかが灼熱で溢れかえり、もはやお尻の割れ目が見えなくなるほどに盛り上がっている。

もう、ショーツのなかはドロドロで満たされていて、おまたの深いところにまで食い込んできている有様だった。

**ブリッ、！　ブリブリブリッ！
にゅるるるるるる！**

スパッツに沿って内股を陵辱している下痢が、ついに足口から溢れ出してくる。

杏奈は、はしたなくがに股になりながら、下痢を漏らしていくことになった。

「はぁ……、はぁ……、はぁ……」

獣のような吐息。

杏奈は目眩を感じながら、ようやく失便を終えた。

だが、汚してしまったショーツとスパッツが消えてくれるわけではない。

運動靴もおしっこでぐしょぐしょになっている。

「どうしよう……」

杏奈は失便に膨らんだお尻を確かめるように手を這わせてみる。

スパッツは、もうごまかしようのないくらいもこもこに膨らみきっていた。

それにおまたのほうまで茶色いものが広がってきている。

公園の近所に家があるとはいえ……いまから帰れば、きっと誰かに見つかってしまうに違いなかった。

「暗くなるまで待つ……しかない、よな……」

杏奈は故障中の公衆トイレ——その一番奥の個室に隠れることにした。

故障中と貼り紙があるけど、個室に隠れることくらいは許されるだろう。

「酷い臭い……」

個室には、たったひとつの和式のトイレ。

狭い個室は、あっという間に杏奈の茶色い香りによって塗りつぶされる。

自分の身体から出てきたもののはずなのに、杏奈自身、鼻が曲がりそうなほどの臭気だった。

「おまた……冷たくなってきた……」

ただでさえ気持ち悪い下痢が、冷えておまたに食い込んでくる。

それでも杏奈はずっとショーツとスパッツを穿き続けていなければならなかった。

水が止まっているから、汚してしまったものを洗うことさえもできない。

「ううっ、またお腹、痛くなってきた……ああうっ」

ぶりぶりぶりっ！

杏奈は堪らずに、和式のトイレに跨がるとしゃがみこんでいた。腸内が圧迫されると、液体のような下痢が漏れ出してくる。

そのまま――、

杏奈は膝を抱えたまま動けなくなった。

下痢をおもらししたショーツとスパッツを穿き、その下痢が冷え切ってお尻やおまたに食い込んできてさえも、杏奈は和式の便器にしゃがみこんだまま動かない。

ただ、ひたすら時間が経つのを待つことしかできなかった。

☆

「そろそろ、大丈夫、か……？」

杏奈が顔を上げたのは、外がすっかり暗くなり、公衆トイレの電気がついたころ。

いつの間にか、外から聞こえてくる子供達の声が消えている。

恐る恐る、杏奈はトイレから出てみることにする。

「よかった……誰もいない……」

公園はすっかり薄暗くなっていて、誰もいなくなっていた。
その代わりにスズムシが大合唱している。

「帰ろう……」

幸いなことに、家はすぐ近くにある。

杏奈はできるだけ暗いところを選びながら歩き、なんとか誰にも
見つからずに帰ることができた。

今日のことは……、杏奈の誰にも言えない秘密となる。

体験版はここまでです！
ここまで読んでくれてありがとうございました！

次のページからは既刊のCGの紹介です！

～大決壊！ 既刊紹介～



